



対がん協会報

1部70円(税抜き)

第624号

2015年(平成27年)
6月1日(毎月1日発行)

公益財団法人 日本対がん協会 「日本対がん協会」と「対がん協会」は登録商標です
〒100-0006 東京都千代田区有楽町2-5-1 有楽町センタービル(マリオン)13F
☎(03) 5218-4771 <http://www.jcancer.jp/>

主な内容

- 1、2面 第3回がん征圧ポスターデザインコンテスト決定
- 4、5面 全国がん罹患モニタリング集計2011
- 8面 RFLJがごしまレポート

第3回がん征圧ポスターデザインコンテスト

関花恵さん(東海大)が最優秀賞

受賞者一覧

最優秀賞	関花恵	東海大学2年	北海道在住
優秀賞	西脇佑亮	富山大学4年	富山県在住
優秀賞	高山栞	秋田公立美術大学2年	秋田県在住
奨励賞	齋藤祐希	福島工業高等学校1年	福島県在住

*敬称略、プロフィールは応募時点のものです。

学生を対象にした「第3回がん征圧ポスターデザインコンテスト」の入賞作品が決まった。同コンテストは、若い世代にがんについて知ってもらい、新鮮な発想とデザインでがん検診の受診を呼びかけてもらおうという目的で、日本対がん協会が一昨年からはじめた。

3回目の今年、最優秀賞に選ばれたのは東海大学2年生の関花恵さんの作品。「ひとはいずれ死ぬ」という、どきどきとするコピーをずばっと使いながら、温かみのあるイラストで前向きな印象にまとめあげた点が高く評価された。

そのほかの入賞作品は、富山大学4年の西脇佑亮さんと、秋田公立美術大学2年の高山栞さん、そして奨励賞として福島工業高等学校1年の齋藤祐希さんの作品がそれぞれ選ばれた(2面に関連記事)。

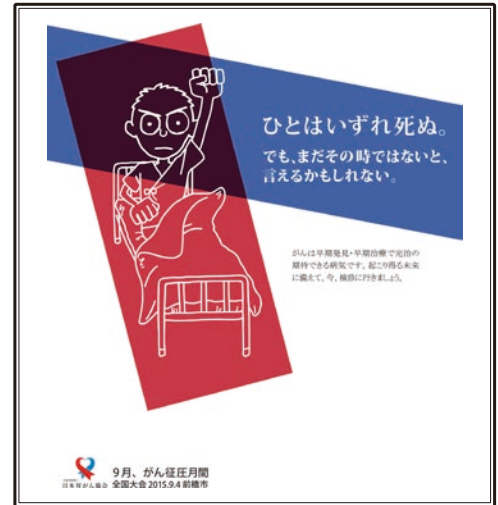


審査風景

最優秀賞を受賞した関花恵さんは、「人にはそれぞれ死ねない理由があると思うんです。直球なコピーは応募する直前まで悩みましたが、受賞できてとても嬉しいです。自分の身体は自分だけのものじゃないと思うので、ポスターを見た人ががん検診に行ってくれたらいいと思います」と喜びを語った。

審査後の講評では「ポスターというものの役割が昔とは変わって来ているが、このがん征圧ポスターは病院などで待ち時間に見るもので、大事なコミュニケーションの手段になるはず。もっともっと大勢の人に応募してもらいたい」などの意見が出された。

審査会は4月15日に東京都千代田区の有楽町朝日スクエアで行われた。審査員は、大谷剛志(厚生労働省健康局がん対策・健康増進課課長補佐)、岸田徹(若年性がん患者団体STAND UP!!運営委員)、中川恵一(東京大学医学部附属病院放射線科准教授)、廣村正彰(グラフィックデザイナー)、本



最優秀賞作品

審査員講評

キャッチフレーズの中に「死」という言葉を使いながら、人生と言う長い時間の中で前向きにがん検診をとらえたコピーが秀逸だった。

田亮(クリエイティブディレクター)、松田一夫(福井県健康管理協会副理事長・県民健康センター所長)、秋山歌太郎(日本対がん協会理事長)、本橋美枝(日本対がん協会広報グループマネジャー)の8名。

ポスターは9月のがん征圧月間に合わせて全国の自治体、保健所、病院などで掲示される。また、9月に前橋市で開催されるがん征圧全国大会で表彰される。

がん相談ホットライン 祝日を除く毎日
03-3562-7830

日本対がん協会は、がんに関する不安、日々の生活での悩みなどの相談(無料、電話代は別)に、看護師や社会福祉士が電話で応じる「がん相談ホットライン」(☎03-3562-7830)を開設しています。祝日を除いて毎日午前10時から午後6時まで受け付けています。相談時間は1人20分まで。予約は不要です。

医師による面接・電話相談(要予約)
予約専用 03-3562-8015

日本対がん協会は、専門医による面接相談および電話相談(ともに無料)を受け付けています。いずれも予約制で、予約・問い合わせは月曜から金曜の午前10時から午後5時までに☎03-3562-8015へ。相談の時間は電話が1人20分、面接は1人30分(診療ではありません)。詳しくはホームページ(<http://www.jcancer.jp/>)をご覧ください。

がん征圧ポスターデザインコンテスト 個性あふれる優秀賞・奨励賞の3作品

ユーモアで訴求 西脇佑亮さん



審査員講評

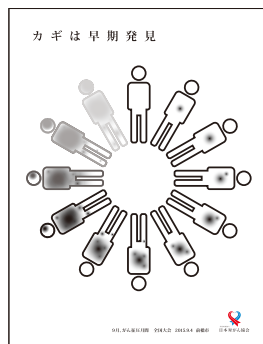
大胆で柔らかい発想がとても良い。ガン検診は値段が安いから受けましょうという切り口も新鮮。一方で「CANCER」という言葉でつなげることには少し無理があった。

富山大学の西脇佑亮さんの作品は、応募作品の中で珍しくユーモラスなタッチで審査員の目を引いた。モノクロのカニの写真一枚と、「高価なカニはおいしいですが、がん検診は低費用でも受けられます」のコピー。「がん」と「カニ」の双方の意味を持つ「cancer」にかけて、がん検診の受診費用はカニより安いことを強調した。

コンテストを知ったときには、締め切りまで2週間を切っていたが、審査員に憧れのグラフィックデザイナーである廣村正彰さんの名前があったことと、コンテストの告知コピーである「デザインでがんは減らせるか？」の問いに触発されて挑戦したくなったという。下調べに1週間かけ、コピーを100案近く考えた。このコピーのヒントは、同じく審査員の中川恵一東京大学大学院准教授の著書がヒントになったそうだ。

グラフィックデザイナーを目指して、大学でもデザインを専攻している。これまでも何回かコンテストに応募したが、受賞したのは今回が初めて。「結果を残せてうれしい」と話した。両親に報告したところ、作品の画像を周囲に見せるなどして喜んでくれているらしい。

早期発見の重要性 高山菜さん



審査員講評

ピクトグラムで象徴的に伝えたデザインの完成度が高かった。ビジュアルが非常にシンプルな作りなので、せめてコピーでもう少し温かみを出した方が良かった。

秋田公立美術大学の高山菜さんは、がんの進行を時計に模して表現した。大学に置いてあったチラシでこのコンテストを知り、前回の受賞作品のきっかけで惹かれたという。

がんについて調べていくなかで、早期発見すれば治る可能性が高いことを初めて知る。早く見つければ治ることを伝えなきゃ、と思いテーマは固まった。しかしビジュアルイメージが定まるまでには時間がかかった。ピクトグラムという、非常口サインやトイレのマークなどにも使われている、情報の視覚イメージを単純な図記号で示す技法を用いたいと考え、応募作以外にもがんになった人と健康な人との対比など何パターンも考えたという。また、一部のがんに特定せずがん全般について表現する点や、がん患者に配慮しながら伝えたいことを伝える点が難しかったと話す。

作品が出来上がったのは応募期間の最終日。地道な努力が実を結んだ受賞となった。受賞を知らせると、「本当ですか？嬉しいです」と弾んだ声で喜び、「今回の受賞で自信がついた。今後の制作にも前向きに取り組んでいきたい」と話した。

クイズで注意喚起 齋藤祐希さん



審査員講評

誰もが思わずこのポスターの細部に見入ってしまった。選んだ文字が「癌」が適切だったのか？「体」の方が良かったのではないかと。デザインがシンプルだったらもっと良くなったのじゃないかななどの意見が出た。

奨励賞の齋藤祐希さんは福島工業高等学校の1年生。同コンテストの応募資格は大学生、大学院生、短大生、専門学校生としていたが、今年は思いがけず高校生や高等工業専門学校生からの応募が5作品もあった。応募資格からは外れるが、若者への啓発という同賞の趣旨にかなっていることから審査対象に含め、齋藤さんの作品が選ばれたので奨励賞という新たな賞を設けた。

ドット絵でつくられた「癌」という文字の中にひとつだけ、イガイガした金平糖のような形をしたドットが紛れている。このひとつを10秒以内に見つけよ、というクイズ形式になっており、がんの早期発見を想起させる作品になっている。

齋藤さんは、身近な人をがんで亡くした経験があり、闘病する姿も見てきた。そのときの、もっと早く見つければ助かったかもしれないという思いから、今回応募したそうだ。「若い人にも、もっとがんに関心を持ってほしい。多くの人ががん検診を受診して、がんになっても治癒率が上がるように願っている」と話した。

RFLマイ・オンコロジー・ドリーム奨励賞を受賞して

岩手医科大学 森川直人

この度は、リレー・フォー・ライフ マイ・オンコロジー・ドリーム奨励賞を頂き、本当にありがとうございます。ASCO(アメリカ臨床腫瘍学会)で例年、多くの魅力的な発表をしている、あこがれのMD アンダーソンがんセンターで学ぶ機会を得ることができた喜びは、なんと表現して良いかわかりません。また、「リレー・フォー・ライフ」によせられた、患者さん、ご家族、がん診療に期待する多くの方々からのご寄付をもとにした、この奨励賞をいただいたことは、がんに取り組む医師の一人として本当に光栄に思うとともに、身の引き締まる思いでもあります。



私は東京都日野市の出身で静岡の浜松医大を卒業後、長く宮城県で働いていました。最初は呼吸器内科医として、後半は肺癌を専門とする腫瘍内科医として、市中病院での診療に力を多くを注いできました。2年前より岩手医科大学に異動し、後進の指導や研究、地域の先生からのコンサルテーションに取り組んでいます。

東北は豊かな自然と心の温かい人々が沢山いる素晴らしいところですが、一方で深刻な医師不足が続いている地域です。4年前におきた東日本大震災は岩手、宮城、福島に深い傷跡を残し、沿岸部を中心に医師不足にも追い打ちをかけています。とりわけ、がん化学療法を専門とする医師の不足は顕著で、東京に162名いるがん薬物療法専門医は岩手には6名しかいません。

NHK 連続テレビ小説「あまちゃん」の舞台になった久慈市とその周辺には常勤の呼吸器科医・腫瘍内科医がおらず、肺癌の患者さんは往復4時間かけて八戸に行くか、5時間かけて盛岡に行かないと専門的な治療を受けられません。岩手の多くの地域では、患者さんたちが長時間の移動に耐えて治療を行っています。また、地域の病院でも一般呼吸器科医や外科医の努力で何とかがん診療が維持されている状況です。

このような環境のなかで、私は質の良い Community Opinion Leader(地域医療の推進者)となることを目指してきました。自らが多くの患者さんを診療し、若い先生を指導し、がん診療の魅力を語り、地域の医師から信頼・相談され、彼らと協力しながら小規模でもユニークなコンセプトの臨床試験を行って全世界に発信したいと願っています。そして東北でがん診療に取り組む医師を増やして、一人でも多くの患者さんに標準治療が届けられるよう益々取り組んで行きたいと思っています。

今回の留学研修期間中に得た MD アンダーソンでの経験を、残さず持ち帰って、東北の医師、メディカルスタッフ、そして患者さんたちと共有できるよう、精一杯努力したいと思います。リレー・フォー・ライフにご協力いただいた皆様、対がん協会の皆様、上野先生、Dr.Boglerをはじめとする MD アンダーソンがんセンターの先生方に心より感謝いたします。

虎の門病院臨床腫瘍科 三浦裕司

この度は、リレー・フォー・ライフ マイ・オンコロジー・ドリーム奨励賞に選出いただき、誠にありがとうございます。日本対がん協会の皆様、MD アンダーソンがんセンター、Global Academic Program の先生方、そしてリレー・フォー・ライフの皆様へ深く感謝申し上げます。また、本賞に応募するにあたり、海外留学に理解と協力を示してくれた妻と子ども達にも感謝したいと思います。



今回、このような素晴らしい賞をいただき、また MD アンダーソンがんセンターという世界トップクラスの病院で研修できる機会をいただき、大変嬉しく思っていると同時に、身の引き締まる思いです。私は、これまでに血液腫瘍、固形腫瘍と幅広いがん種に対応する、一般腫瘍内科医としての研修、経験を積んで参りましたが、5年程前に自身のライフワークを泌尿器腫瘍、特に腎がんと決め、現在、その治療、研究に力を入れています。現在、腎がんに対する非常に多くの抗がん剤が開発、承認されていますが、日本には泌尿器腫瘍を専門とした腫瘍内科医がほとんどおりません。そのため、私は多くの泌尿器科医や泌尿器以外の腫瘍を専門とする腫瘍内科医から、様々な事を学びつつも、基本的には独学でこれまで学んで参りました。しかし、これから将来における私自身の成長、日本の患者さん達への貢献、将来この分野に進みたいと考える腫瘍内科医の教育などを考えるにあたり、今のままでは限界があり、海外に出て泌尿器腫瘍内科医のメンターのもとで学ぶ必要があると考え、今回、マイ・オンコロジー・ドリーム奨励賞に応募致しました。

私の Vision は、「腎がんに関わるあらゆる苦悩から人々を解放する事」です。この Vision を達成するために、私は2つの事が必要だと考えております。それは、「より良い治療法の開発」と、「患者さんのより良い生活へのサポート」です。まず、治療については、innovative な薬剤の研究、開発が必要だと考えます。近年、我が国でも、新薬早期臨床開発が行えるように、様々な試みがされていますが、残念ながら泌尿器腫瘍の領域ではまだ進んでいないのが現状です。私は、帰国後この分野の進歩に従事できるように、MD アンダーソンがんセンターで、新薬開発に必要な translational research の知識、新薬早期臨床試験の立案などについて学びたいと考えています。

次に、患者さんの生活に対するサポートについてです。多くの薬剤の開発により、腎がんの生存期間は大きく延長しましたが、その長い期間における患者さんの身体的、精神的、社会的などあらゆる面における人生のサポート体制が整っているとは言いがたいと思います。今回の研修で、MD アンダーソンがんセンターでの多職種によるチーム医療の取り組み、また、患者さん自身や社会の取り組みについても学んできたいと思います。

がん罹患者は年に85万人超に

全国がん罹患モニタリング集計2011

国立がん研究センターがん対策情報センターは、日本のがん罹患者数・率の最新推計値を「全国がん罹患モニタリング集計(MCIJ)2011年罹患者数・率報告」にまとめた。それによると男女合計で85万1537人となり、2010年より男女計で約4.7万人増加した。各部位の罹患者数の順位は、2010年と比較して男性では前立腺がんが4位から2位となり、女性では順位の変動はなかった。

各地のがん登録に基づくデータを分析し、日本のがんの基本データの一つとなっている「全国がん罹患モニタリング集計(MICJ)」の刊行は2003年から数えて9冊目。「都道府県がん登録データの全国集計と既存の資料の活用によるがん及びがん診療動向把握の研究」班が分析し、がん対策情報センターから刊行された。

今回は2016年からの「全国がん登録」の施行を目前に控えているとあって、過去最多の40県(2010年は30県)が地域がん登録を行った。そのうち日本の人口の66.1%をカバーする39県が登録精度基準を満たしており、特に精度が高く、従来より厳格な国際基準を満たした14県(山形、栃木、群馬、新潟、福井、愛知、滋賀、島根、岡山、広島、山口、香川、長崎、熊本)のデータを元に推計された。

同センターは罹患者数が大幅に増えたことと、部位別の罹患者順位が変動した背景について、「がんのリスクが急増したわけではなく、届出数の増加と元となるデータの精度の向上の影響が大きい」とみている。

11年の報告によると、全国のがん罹患者数は男性が49万6304人、女性が35万5233人で、合計85万1537人だった。10年から男性は約3万人近く、女性も2万人近く増加した。

男女別に主ながんの罹患者数をみると、男性は依然として胃がんが最も多くて9万83人。次いで前立腺がんが7万8728人、肺がん7万5433人、大腸(結腸と直腸)がん7万2101人、肝臓がん2万9192人と続く。09年から増加が目立っていた前立腺がんが10年から1万3794人増えて前年の4位

から2位となり、前立腺がんの急増が裏付けられた。胃がんは3355人、肺がんは1706人、大腸がんが4046人の増加だった。

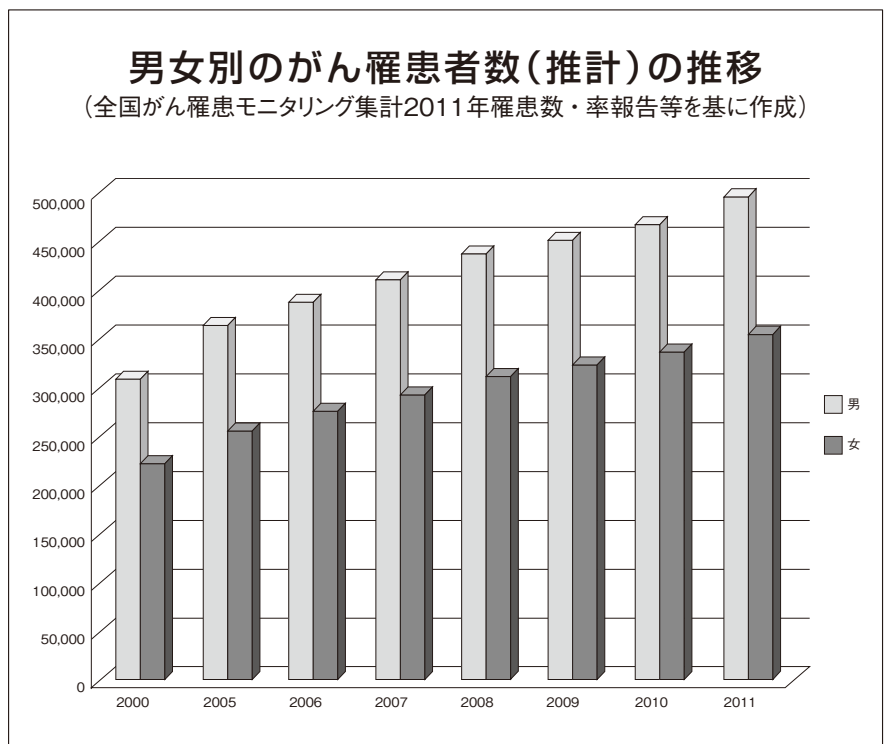
女性では11年も乳がんが最も多くて7万2472人。大腸がん5万2820人、胃がん4万1950人、肺がん3万6425人、子宮がん2万6741人となっている。乳がんは増加数も1番多く、4401人増。子宮がんも3374人と増加が目立ったが、順位の変動は無かつ

た。ただ経時的な比較をする上では、過去のモニタリング集計で利用したデータの期間(2002年値まで3年平均、2003年値以降は単年)や、採用基準を満たした地域に変動があるので注意が必要としている。2016年から「全国がん登録」が施行され、現在は推計値としているものが実数把握できるようになることが期待される。

2011年の罹患者数(全国推計値)が多い部分は順に

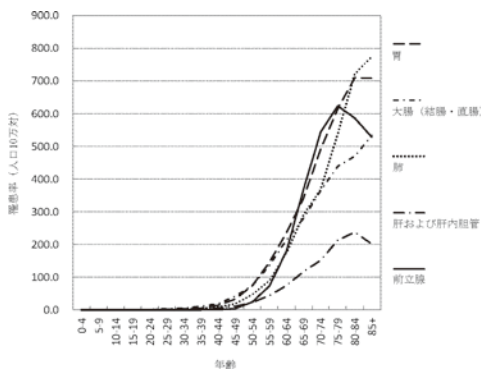
	1位	2位	3位	4位	5位
男性	胃	前立腺	肺	大腸	肝臓
女性	乳房	大腸	胃	肺	子宮
男女計	胃	大腸	肺	前立腺	乳房

地域がん登録全国推計によるがん罹患データより作成



男性 胃がんや大腸がんは50代後半から急増 高齢者に目立つ前立腺がん

男性の主ながんの年齢階級別の罹患率(推計)
(全国がん罹患モニタリング集計2011年罹患数・率報告等を基に作成)

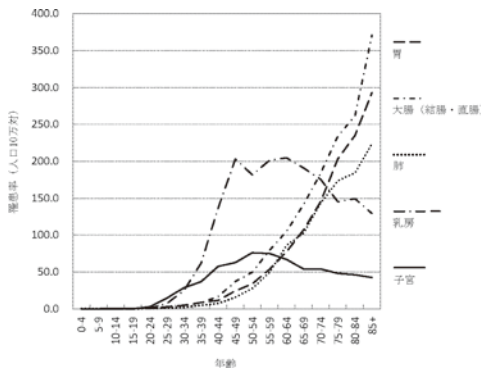


男性の上位5部位(胃、大腸、前立腺、肺、肝および肝内胆管)の年齢階級別の罹患率(推計)をみると、胃がんや大腸がんの曲線の立ち上がりが早く、40後半から増え始め、50代後半から急増していた。大腸がんは60代に入るとやや勢いが鈍り、前立腺が上回り、70代では肺がんに逆転されていた。肺がんも年齢が上がるにつれて増加する傾向は同じだが、急増する年齢が胃がんより10年ほど遅く、60代近くなってから急増し、80代では胃がんの罹患率を超えていた。肝がんはさらに遅く、60代から緩やかに増え始めるが、80歳以降、減少傾向が見られた。

5部位の中で一番増加する年齢が遅いのが前立腺がんで、40代までの罹患率は極めて低いが50代後半から急増し、高齢者のがんであることを特徴付けた。

女性 乳房・子宮は若年からリスク 乳房は2つのピーク

女性の主ながんの年齢階級別の罹患率(推計)
(全国がん罹患モニタリング集計2011年罹患数・率報告等を基に作成)



女性の5部位(乳房、大腸、子宮、胃、肺)に目を移すと、やはり乳がんが特徴的な罹患率の曲線を示して目立っている。30代前半から急増し、40代後半でピークを迎えた後横ばいとなるが、60代前半でも再び増えて2つの山ができています。

子宮がんは乳がんよりさらに早く20代から増え始め、50代前半にピークを迎えていた。胃がん、大腸、肺はいずれも似たような曲線で、50代から増え始め最高齢の年齢階級までずっと増え続けるが、大腸がんは男性に比べて増加の仕方が急激であることが目を引く。

がん罹患 発見経緯も集計

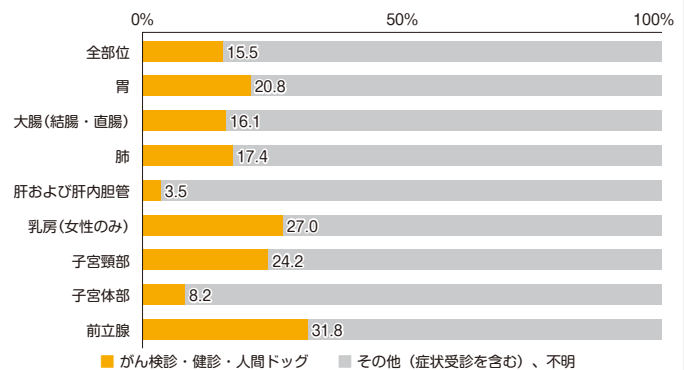
前立腺、乳房、子宮頸部などでがん検診など高い割合

がん罹患モニタリング集計では男女計の主要部位の発見経緯もまとめている。ただし2011年は前述の14県の集計値で、それ以前まで採用していた提出全県のデータに基づいた値ではない。

がん検診または検診・人間ドックによって発見された症例の割合は下表のとおり。割合の多い部位は、前立腺(31.8%)、乳房(女性のみ、27.0%)、子宮頸部(24.2%)、甲状腺(22.4%)、胃(20.8%)の順であった。これ以外に市区町村による対策型検診の対象部位である大腸、肺においても、それぞれ16.1%、17.4%と比較的高い割合が示された。また、まだがんが上皮細胞と組織の境になる膜を突き破っていない状態で、この段階で治療すればがんを取り切れる可能性が高いとされている「上皮内がん」を含めると、子宮頸部では40.3%、乳房(女性のみ)は29.3%と大幅に比率が上がる。

今後早期発見、早期治療につながるがん検診を受ける人が一層増えることを期待したい。

発見経緯 (主要部位 男女計)



全国がん罹患モニタリング集計2011年 罹患数・率報告等を基に作成

日本対がん協会賞、朝日がん大賞 候補者募集

今年度の「日本対がん協会賞」と「朝日がん大賞」の候補者の募集を始めました。自薦・他薦は問いません。締切は6月30日(火)(必着)です。奮ってご応募ください。

「日本対がん協会賞」は、対がん運動に功績のあった個人および団体を顕彰する賞で、検診の指導やシステム開発、第一線の検診・診断活動、がん予防知識の普及や啓発活動などに、多年にわたって地道な努力を重ねた個人や団体が対象です。

「朝日がん大賞」は、日本対がん協会賞の特別賞として2001年に朝日新聞

社の協力を得て創設しました。「がん予防」を中心に、がん医療・研究分野、画期的な医療機器の開発など幅広い分野を対象にしています。また患者・治療者の活動も視野に入れていきます。活動期間は問わず、第一線で活躍している個人・団体が対象です。

いずれも年度賞で、協会賞は個人・団体各数件、がん大賞は1件で、日本対がん協会内の選考委員会で選考します。受賞者は、9月1日付けで発表、9月4日に群馬県前橋市で開かれるがん征圧全国大会で表彰します。協会賞には盾と記念品、朝日がん大賞には、

盾と副賞100万円を贈ります。朝日新聞紙上でも紹介されます。

応募にあたっては、応募用紙を日本対がん協会のホームページ(<http://www.jcancer.jp/recruit/6044>)からダウンロードし、必要事項を記入の上、〒100-0006

東京都千代田区有楽町2-5-1 有楽町センタービル(マリオン)13階 日本対がん協会「日本対がん協会賞」係に郵送してください。

問い合わせは、「日本対がん協会賞」係(03-5218-4771)まで。

「チームがんでもいいじゃん」海を渡る RFLカリフォルニア・サンノゼレポート 参加メンバー一同

SNSを通じて全国のリレーファンが集結した「チームがんでもいいじゃん」のメンバーが、リレー・フォー・ライフ発祥の地、アメリカのリレーイベントに参加して来ました。自分たちのテントを出して現地の人たちと触れ合い、見て、感じた新鮮な異文化体験をレポートしてくれました。

新渡戸稲造は日本を理解してもらうために「武士道」を書いたと言います。精神を大切にすると日本とは一味違う、欧米の文化を実感しました。

まずエントリーした途端に、連日メールが届くようになりました。その内容は毎回「募金」について。結果がすべてだ、と言わんばかりのメールにさかさうんざりでした。チームリーダー会議でも募金額を他会場と競っていると、現地で僕らをサポートし続けた仲間からの連絡もありました。

一方、会場使用や舞台や仮設トイレはスポンサー持ちで、テント貸出等には有志が担い、必要経費というものがない存在しませんでした。その代り舞台の上にはスポンサーのフラッグが掲げられていました。募金は細かく分類・集計し、そのままACS(アメリカ対がん協会)に渡ります。会場も公立中学校で、18時からRFLが始まるのに午前中は普通に授業をしていました。そうした場所を借りられるのも生きたがん教育が浸透している成果なのかもしれません。募金集めに集中できるのはACS

の日々の努力があるからでしょう。

大会当日、形式に頼らないRFLのスタート。(日本でするように)手形をとることもなく、フラッグを持つこともなく、各々腕を組み、大きく手を振りながら歩くサバイバーズラップ。

HOPEの文字もなく、エンピティテーブルもない。ルミナリエの周りを静かに偲びながら歩くサイレントウォーク。儀式がなくても十分に思いは伝わるものです。長時間サイレントウォークがなされ、その時間舞台上では故人への思いが語られていました。家族のグリーフを分かち合うという真髓を垣間見ました。反面、作業も簡素化しルミナリエも蛍光スティックでした。

会場を歩いている人たちを見ると圧倒的に子どもたちが多かったです。小学校低学年から中高生には、引率者がリーダーとして付き添っていました。まるで近所のお祭り・緑日に来ているような感じですが、誰もがよく歩いています。テントでのんびり休憩している様子はあまり見かけられませんでした。

そして自分の身の丈にあったお金の集め方が印象に残りました。子どもが石をペインティングして売ったり、キャラクターの衣装を着た人と写真撮影をしたり、顔にパイを投げたり、装飾したブラジャーを着けて歩いたり募金をするためには躊躇することなく、しかし本当に楽しそうでした。

同時に終盤になり私たちのテントで小さなグッズを「プレゼントしますよ」と言うと、「それはダメ。RFLに募金をしに来たのだから」と言われ、参加者一人一人の意識の高さに驚かされ反省をした次第です。

彼らは一人一人意識して参加しています。この募金でがん征圧をしようと信じる市民とACSのパートナーシップ。日本とは異なるものでした。私たちも異文化を吸収しながら、日本らしさももったRFLを成長させていきたいものです。



サンノゼの人たちに混ざってウォーク

今年も西武プリンスドームがピンク色に 埼玉西武ライオンズ 「LIONS HAPPY MOTHER'S DAY」で乳がん、子宮頸がんを啓発

母の日に近い5月6日(水)、埼玉西武ライオンズ(埼玉県所沢市)が「LIONS HAPPY MOTHER'S DAY」を開催し、西武プリンスドームがピンク色に染まった。

この企画は母の日にちなんで、日ごろ自分のことを後回しにしがちなお母さんに感謝の気持ちを表すとともに、「乳がん」や「子宮頸がん」について知ってもらい、検診受診を促そうというもの。日本対がん協会の協力で昨年からはじまった。今年は協賛企業も増え、天候にも恵まれて大勢の観客が試合とイベントを楽しんだ。

当日の試合前イベントでは、自身もひとり親家庭で育った秋山翔吾選手のお母さんへの感謝のメッセージを伝えたVTRを放映し、秋山選手が試



ピンクのビクトリーバルーン

合に招待している、年間120組のひとり親家庭のご家族を代表して、宮原司さん、楽良真(ららま)くん親子がセレモニアルピッチを行った。

続いて、がんサバイバーの歌手、松田陽子さんの国歌斉唱、同じく乳がんサバイバーでピンクリボンフェスティバルでもおなじみの山田邦子さんが始球を務めた。山田邦子さんの始球式では、来場者がピンク色のハート型メッセージボードを掲げて応え、会場が

ピンク色に染まった。日本対がん協会もグラウンド内でピンクの横断幕を掲げ、がん検診の受診を呼びかけた。同協会のがん啓発ブースでは、女性特有のがん知識クイズを実施したり、お母さんへの感謝のメッセージを書いてもらい、乳がん、子宮頸がん無料検診クーポン券をプレゼントした。

当日選手が着用した帽子等でチャリティーオークションを実施し、その収益金は同協会に寄付される。



協会ブースで啓発活動

はい座布団一枚!



長野支部から

リレー・フォー・ライフの力

長野県健康づくり事業団 北條千秋

昨年の10月4日、3回目となる「リレー・フォー・ライフ信州長野」が長野市の城山公園で幕を開けた。最大のサプライズは実行委員長の柄澤清子さんが、リレー・フォー・ライフ(RFL)のご本家、米国対がん協会から「ヒーローズ・オブ・ホープ」として表彰されたこと。日本国内でも毎年2、3人しか選ばれない栄誉。熱い思いでここまで引っ張ってきたことが評価されたもので、実行委員会にも大きな喜びと誇りをもたらした。

RFL信州長野は人と人との出会いから始まった。2006年、米国からつくばに上陸したRFLが順調に開催地を増やしていく中で、対がん協会の支

部を兼ねる当事業団としても地元での開催を模索していた。しかし、われわれが主導しては、患者さん自らが活動の中心にいるというRFL本来の意義を失うとも考えていた。

そんな折、柄澤さんはもちろんのこと、日本対がん協会職員として米国や豪州のRFLを体験し、その後、長野朝日放送に赴任した市川博さんに出会ったことで事態は進んだ。さらに、長野日赤病院と長野市民病院が「がん診療連携拠点病院」として積極的に参画。兄弟リレーとなったRFL松本との連携もあり、RFL信州長野は参加された方々はもちろん、応援してくれた多くの皆さんにとって満足のいく大会に仕上がっていった。

当事業団は当初、事務局を担うとともに、当日はがん検診や検診車の展示、啓発ブースなどを担当した。その結果、がん検診の重要性を広く伝えたり、がん検診実施機関として知名度を

高めたりすることができた。また、日ごろ会えない治療の現場にいる医師や看護師、さらに多



くのがん患者さん達と交流できたことは大きな財産となった。

もちろん、事業団としてRFLとの関わりを続けていくには苦労も多い。しかし、我々が会議室や資材・印刷物の保管場所の提供、対外的な連絡先や対がん協会の窓口になることだけでも実行委員会の負担は大幅に軽減される。そうやってRFLが広がっていけば、国民のがんやがん患者への理解は高まるし、検診の受診率も向上するだろう。

(ほうじょう ちあき 1978年大学卒業後、長野県総合健康センター勤務を経て、2004年から長野県健康づくり事業団。総務部長、南信事業所長等を務める。)



沢山のチームが勢ぞろいして

RFLJ2015開幕 桜島を背景に2000人が集う RFLJかごしま

5月9日、10日、全国に先駆けてリレー・フォー・ライフ・ジャパンかごしま(主催:リレー・フォー・ライフ・ジャパン実行委員会、日本対がん協会)が実施され、今年のリレーイベントが賑やかに開幕した。



和気あいあいとした実行委員会

会場は雄大な桜島を見渡す鹿児島市のウォーターフロントパーク、ドルフィンポート前広場という抜群のロケーション。早朝からの土砂降りと火山灰が心配されたが、サバイバースウォークがスタートする昼過ぎには徐々に雨が上がり、昨年を上回る約2千人の人々がリレーイベントの24時間を楽しんだ。

鹿児島でのリレーイベント開催は今年で4回目。前身となる「つなげよう!命のリレー」から数えると9回目となる。患者や家族、医師・看護師などに加え、協賛企業、地元サッカーチームの鹿児島ユナイテッドFCや鹿児島大学などの学生たちも応援に駆けつけた。今年は地元コレクターの協力で、マニア垂涎のクラシックカーも会場に展示され、集客に一役買っていた。

149通の思いを乗せて 命のリレー川柳

名物企画「つなげよう!命のリレー川柳」も3回目。徐々に知名度も上がり、今年は全国から149通もの応募があった。川柳ということ



重田紀幸さん

で「患者さんを傷つけないと良いけど」と多少心配もあったが、集まった作品は本当に暖かいものばかりだった。当日表彰された優秀賞の作者の一人、重田紀幸さんは小児がんサバイバーで、若者患者会「きらら」のメンバー。「川柳なんて作ったの初めてですよ」と照れていたが、その作品「がんになり

普通の事が 幸せに」は切ない中にも、ほのかに明るさが感じられる素敵な作品だった。

私たちが何かやりたい 子ども実行委員会

会場で一際元気いっぱいだったのが、子ども実行委員会のブース。幼稚園から中学生までの15名で、綿菓子や、手作りのアクセサリーを売ったりと、寄付集めに大活躍していた。

委員長の高橋まやちゃんは、実行委員会の高橋真由美副委員長の娘さん。ほかのメンバーも実行委員の子どもたちが中心だが、父母の活動を見聞きする中で、「自分たちも何かしたい」と言い出したのがきっかけで2013年に結成された。

子どもたちは毎週のように集まってはイベントの準備に励み、今年は吹上浜で砂の像の出来栄を競う吹上浜砂の祭典小学生大会にも参加して入賞、大いにRFLの宣伝をしてくれた。「学年も学校も違う友達同士で何かをやって今はなかなかないでしょう。子どもたちは本当に楽しそうでしたね」と、副実行委員長の野田真記子さんは話す。



元気な子ども実行委員会のメンバー

今年は部位別 青空がんサロンも開催

会場ではがん患者と家族のための青

空がんサロンが開催された。今年は「同じ部位の患者さんとお話してみたい」との声にこたえて、時間を決めて部位ごとのグループに分けて話ができるようにした。

ボランティアとして運営に協力していた今給黎

総合病院の看護師、村崎まことさんは、リレーで前向きなサバイバーと接するうちに触発されて、乳がんの認定看護師の資格を取ったという。「頑張っているがん患者さんに背中を押される形で、自分ももう一段頑張ってみようと思いました」と話してくれた。



村崎まことさん

王会長のバットに騒然 チャリティーオークション

ステージイベントのハイライトはチャリティーオークション。バナナのたたき売り芸人のだいでう小平太さんの軽妙な司会に会場は大盛り上がり。最後に何と、福岡ソフトバンクホークスの王会長の直筆サイン入りバットが出されると、悲鳴交じりのどよめきが起こった。落札価格もどんどん吊り上がり、競り落とした人は大喜びだった。このバットは、実行委員が何度も王監督に手紙を書いてお願いして実現した。

鹿児島の実行委員会は総勢60名を数える大所帯。リレーウォーク班、ステージ班、協賛班、サバイバースワップ班などそれぞれの班に分かれて活動するので、負担が軽減されて参加しやすいそう。「でも明日はきっと倒れていると思います」と苦笑する野田副委員長。委員長の白石隆志さんも、「雨が上がって本当に良かった。毎年天気が荒れ気味だから、今年が一番良かった」と心からほっとした様子だった。